

2008年ベスト地球・海洋SFファン投票 ノミネート作品の紹介

●新作部門

(国内小説・実写作品賞)

「鯨の王」(藤崎慎吾、文芸春秋)

「白鯨」の現代版。マリアナ諸島海域を航行中の米攻撃型原潜の乗組員が次々と原因不明の出血で倒れていく。一方、「しんかい6500」は伊豆・小笠原海溝の西方の海山で体長が通常のマッコウクジラの2倍もある新種の骨を発見。やがて、マリアナ諸島の海山に設置された海底熱水鉱床探査基地(ローヌクロス)を新種ダイマッコウの群が襲う。それに対し、復讐を誓う米新鋭原潜が戦いを挑む。それに日本の鯨類学者と女性潜水船パイロットが絡む。

著者が「しんかい6500」で南西諸島の鳩間海丘の熱水噴出孔に潜航したときの経験が単行本化の際に反映されている。

「進化の設計者」(林譲治、ハヤカワSFシリーズJコレクション)

2036年。連結階層シミュレータによる台風の高精度な進路予測が大きく外れ、その原因としてプランクトン「ネオカラヌス」の進化が浮かび上がる。

一方、スマトラ島付近ではメタンハイドレートをプラスチック素材化する対規模プロジェクトが、全長2キロのメガシップ《ムルデカ》を拠点として進められている。その付近の大陸棚、氷期に大陸スندانランドだった場所で古代原人の発掘作業中に謎の死亡事故が発生。それには人間の進化は知的存在によって設計されたとするインテリジェント・デザイン説を信奉する集団「ユーレカ」が……。

「イーゲル号航海記/1 魚人の神官」(斉藤洋、偕成社)

少年カールは、ほんの気まぐれで港に向ったことで天才科学者ローゼンベルク博士が発明した潜水艇に乗り込むことになる。乗組員はほかに2人+1匹。一行は北海のヘルゴラント島近くに3年前から観測されている巨大な渦の中に潜航し、はげしく回転するが、やがて逆回転を経て、巨大な岩のドーム内に浮上する。その周囲に7つの洞窟があり、その後8つ目の洞窟が現れる……。

「ペガサスの刻印」/「海の北斗七星～迷宮の冒険ファンタジー1～」(星さいか)

ある予備校生のもとに、ペガサスに乗った美しい女性が訪れる。S系第7惑星体の都レプティスマクスの皇子を迎えにきたという。S系第7惑星体は地球と異なる時空に存在し満月の夜にだけ地球上のある地点と繋がる……。

その後のシリーズでは地球の各所の遺跡や海底遺跡が登場する。「海の北斗七星」ではアンコールワット遺跡の南方のトンレサップ湖をダイビング調査し、そこで手がかりを得て幻の都シャングリラを求めてインドに向かう……。

「へんないきもの三千里」(早川いくを、バジリコ株式会社)

まじない好きでオシャレ好きで生き物嫌いな小六のユカリは、古書店で究極の呪法本を発見。そのまじないで異世界に放り込まれたユカリは、巨大なクモやアリに翻弄され、ヒトの中で免疫細胞軍と戦い、“知患者の森”を探して深海を旅する……。

(海外小説・実写作品賞)

「擬態 カムフラージュ」(ジョー・ホールドマン、早川書房)

表紙には海底に突き刺さった謎の人工物体を調査する潜水艇が描かれているが、本文ではサルベージシーンが一切省略されているのは肩透かし。しかし物語は面白い。百万年以上も海底にあったと推測されるその物体の調査が難航する。一方、どんな姿にも変わることができる異星人(変わり子)は、遙か昔からさまざまな海洋生物に変身してきたが、やがて人間として生活を始めていた……。

「原潜、氷海に潜航せよ」(ジョー・バフ、ヴィレッジブックス)

セラミックス製船殻を持ち、水深4000m以上の潜航能力を持つ米新鋭原潜(チャレンジャー号)のシリーズ第3作目。小型の戦術核を応酬しあうかなり沈鬱な世界で、戦術核魚雷による潜水艦バトルはまるでチェスのようだが、各所に地球科学的な内容がちらほらする。ヒロインがスクリプス海洋研で海洋学の博士号を取り、ドイツの天才的な潜水艦艦長の元恋人。肉親を南アフリカ政権に殺され、(チャレンジャー号)に海洋科学アドバイザーとして乗船する。

今回はロス棚氷の下という潜水艦モノでは珍しい場所が宿敵との戦いの舞台となる。

「復活のヴェヌス～ヴェヌスの秘録4」(タニス・リー、産業編集センター)

水の都ヴェネチアのパラレル・ワールド、ヴェヌスを舞台とした「ヴェヌスの秘録」4部作の最終話。前作まではルネッサンス時代から18世紀までだが、最終話では時代が未来に飛び、海底に沈んだヴェヌスが、巨大コンピュータCXに制御されたマグナ・オプテックス製のエア・ドームに覆われて18世紀の姿のままに復元される。海上から海底ドームまではサブヴェネリンというドーム状の船で往来する。かつてのヴェヌスの血縁者がドーム都市に住む有資格者として各地からぞくぞくと集まるが……。

海賊ジョリーの冒険シリーズ「死霊の売人」/「海上都市エレニウム」/「深海の支配者」(カイ・マイヤー、あすなろ書房)

1692年、ジャマイカ島で大地震が発生し二千人以上が命を落とした際に、魔力が解き放たれ、ミズスマシと呼ばれる子供たちが生まれる。その14年後、海賊に育てられた少女ジョリーはある戦いで仲間をすべて失う。異なる時空に存在する(暗黒の海)それに通じる扉(大渦潮)を通じて、クラバウターやアケルスが襲ってくる。(大渦潮)はサンゴでできた海上都市エレニウムの人たちの力でシオルフェン海溝1万mにある巨大な貝に閉じ込められていた。その力が弱まってきたのだ。ジョニーは新しい仲間とともに戦いに挑む。

「イルミナティ」全4巻「ピラミッドからのぞく目」上下、「黄金の林檎」、「リヴァイアサン襲来」(原著1975、ロバート・シェイ、ロバート・アントン・ウィルソン、集英社文庫)

ベトナム戦争の末期、ミュージカル『ヘアー』がロングランされていた頃の作品。どこまでが本当でどこまでが幻覚なのか、誰が本

当の敵、本当の味方か、大変わかりにくい物語だが、ともかく黄金色の潜水艦〈レイフ・エリクソン号〉が登場する。世界最深部まで潜航でき、大西洋を一日で横断できる速力を持ち、3万年前に大西洋に沈んだアトランティス大陸の巨大ピラミッドで謎の組織イルミナティの蜘蛛型水中マシンと戦う。また、標準的自己プログラム・アルゴリズム論理マシンである巨大コンピュータ FOCKUP も登場。

〔アニメ・コミックス賞〕

「蒼のサンクトゥス」(全5巻。やまむらはじめ、ヤングジャンプ・コミックス・ウルトラ)

新世紀初頭、宇宙からやって来た“何か”が直径200kmを越える極めて異質な空間、“A-NEST”(エイリアン・ネスト)を作り出す。そのエリア内で偶然、メタトロン・ノジュールと名付けられた希少鉱物が発見され、常温超電導を可能となり次世代エネルギー革命が起きる。それを採掘する民間会社が出現するようになる。

“A-NEST”内では強力な防護シールドをも打ち破る激しい“嵐”が襲う。潜水艇が採掘したノジュールを船上に回収するためには、特殊な予知能力を持つ“レリクト”と呼ばれる人々のナビゲートが不可欠。そんな採掘業者のひとつハルナ・カンパニーの物語……。

「AIKa R-16」(バンダイ・ビジュアル)

「AIKa R-16」のR-16は、かつてローアングルアニメとして大ヒットした作品「AIKa」のヒロインの10年前、16才だった頃を作品にしたとの意味とのこと。

当時は海中シーンが難しく、サルベイジャーとしての潜水シーンはなかったらしいが、今回は16才ながらサルベイジャーC級ライセンスを持っていて、ウェーブピアサー型母船から発進したタンデム推進の潜水艇を操縦して水没した超古代文明遺跡を探検する……。

「私家版魚類図譜」(諸星大二郎、講談社)

「深海人魚姫」とその続編「深海に戻る」が収録。この人魚の尾びれは垂直である。海棲哺乳類は水平だが、鱗のある人魚としては妥当な設定。人魚らは熱水活動域に棲むが、中層にある酸素極小層に阻まれて、海面までは行くことができない。ある日、若い人魚が潜水艇の仲の搭乗研究者を見て、男が大きな魚に飲み込まれたと思う。それ以来、海上への憧れが募っていく。ついに海上に向けて旅立つが、あともう一息のところまで魚の大群に阻まれて気を失う。そこに深海から浮上してきた潜水艇が。その時、奇跡が起こる……。

後編は12年後、記憶をなくした少女が深海生物学者の養女“まりん”として育てられ、やがて米潜水船の女性パイロットに……。

「海神記」(上下巻、諸星大二郎、光文社コミック叢書)

西暦4世紀の後半。邪馬台国はすでになく、小国が分立し、大和朝廷が姿を現し始める前、朝鮮半島に百濟、新羅、高句麗が出現した頃。南九州で海底火山の爆発などの大津波が頻発し、不漁に苦しめられる。村を失った海人たちの前に、謎の少年ミケツが現れる。ミケツは奇跡を起こし、やがて夫と子供を失った巫女オオタラシに守られ、みんなが幸せになれるという「常世の国」を目指し始める。その動きは次第に古代海人たちの間に広まり、一大勢力となっていく。西の門(関門海峡)ではサイモチの神(巨大なシュモクザメ)との壮烈な戦いが繰り広げられ……。

「終戦のローレライ」(全5巻、原作:福井晴敏、漫画:虎哉孝征、講談社アフタヌーンKC)

樋口監督よりもより原作に近い。ドイツ軍は仏からの戦利潜水艦シュルクーフUF4で画期的な秘密兵器ローレライを日本に運ぶが、米潜水艦の攻撃によりシステムの中核である小型潜航艇(ナール)を放棄。日本に到着したUF4は(伊507)と改名され、(ナール)の回収に向かうが、ローレライの正体は少女の超能力を人為的に発達させたものだった。広島と長崎に原爆が投下され、(伊507)は3発目の原爆投下を阻止するため絶望的な戦いに挑む……。

「漂流物」(デイヴィッド・ウィーズナー、BL出版、絵本)

文が一切ない絵本。砂浜の生き物を観察している少年が一眼レフを発見。そのフィルムを現像すると、驚くべき世界が写っていた。機械仕掛けのタイの群れ、読書するタコ、巻貝の町を背負うウミガメ、タツノオトシゴに取り囲まれる宇宙人、体操する巨大ヒトデ、そして子供が写った写真を持つ子供の写真の……写真が……。

「モノノ怪 式之巻 海坊主」(角川エンタテインメント、アニメ)

モノノ怪を切ることができる「退魔の剣」を持つ謎の薬売りが主人公。江戸に向かう帆船「そらりす丸」は船内に金魚の生け簀を持つ豪華船。ある夜、何者かが羅針盤を狂わせ、「竜の三角」、別名アヤカシの海に迷い込む。さまざまなアヤカシが次々と船を襲い、一本足の魚人の姿をした「海座頭」が乗客の一人一人に「恐ろしいものは何か?」と問いかけ、乗客の過去が暴かれ、50年前、人身御供を生きたまま閉じ込めた虚ろ舟が引き揚げられてくる……。

〔ノンジャンル・クロスオーバー作品賞〕

「知られざる宇宙—海の中のタイムトラベル」(フランク・シェッツィング、大月書店)

独語圏で200万部以上の大ヒット作となった海洋SF超大作「シュバルツ」(邦題「深海のYrr」)の執筆時の取材をもとに書かれたノンフィクション。ビッグバンから生命誕生と進化、雪玉地球説、海洋大循環コンベアベルト、メガ津波などの地球科学の興味あるテーマをカバー。海洋開発分野でも海上輸送、海洋バイオ、海洋エネルギー、自律型無人機、動く人工島までにわたる。

以上の広範な分野を、図表を一切使わずに巧みな比喩で面白く一気に読ませてしまう。これが元ミュージシャン志望の広告代理業者を経た推理作家というのだから驚き!

「人類の足跡10万年全史」(スティーヴン・オッペンハイマー、草思社)

いわゆる「ミトコンドリア・イヴ説」の集大成。現生人類(ホモ・サピエンス・サピエンス)が氷期の気候変動を乗り越えて世界の果てまで進出していく物語。それに加えて、類人猿から現生人類までの進化、特に、250万年前に氷期・間氷期サイクルが始まってからホモ属らの脳容積が急激に増大していった原因を論じている。もうひとつ、考古学分野にも頑迷な権威主義があって、著者はそれにかなり頭にきているのか、かなりしつこく糾弾している。

「スーパーストーム」(NHK/英BBC/米Discovery Channel/独ProSieben 国際共同制作)

地球温暖化が進む中、年々、巨大化するハリケーンの被害を減らすため、飛行機でハリケーンの中でヨウ化銀をまき、海面温度を低下させ、ハリケーンのを弱め、その進路を変えることが試みられる。ところがそれが原因で飛行機は墜落してしまう・・・。

「インナースペース」(高川真一、東海大学出版)

「しんかい6500」、「かいこう」、「ちきゅう」を開発してきた著者が潜水船や水中ロボットの技術を解説する。なんのために開発するのかというニーズを重視しつつ、無人機のケーブルが振れていくメカニズムの話、水中音響学の体系的な紹介、深海掘削のこれから開発されようとしている技術などを、高校で習ったことのある知識でなんとか理解できるように読みやすく工夫されている。

「オデッセイ号航海記：クジラからのメッセージ」(ロジャー・ペイン、角川学芸出版)

海洋に放出される脂溶性の難分解性化学物質は、まず珪藻類などに取り込まれ、動物プランクトン、魚類等を経て生物濃縮されつつ食物連鎖の頂上に位置する人間やマッコウクジラに取り込まれる。このため著者は調査帆船(オデッセイ号)でマッコウクジラにクロスボウでダーツを打ち込んで皮下脂肪を採取する方法によって、有害物質の蓄積を調べる航海に出る・・・。

「神は妄想であるー宗教との決別」(リチャード・ドーキンス、早川書房)

「利己的な遺伝子」の著者が、宗教間の対立に危機感を募らせ、無宗教であることを隠さなければならない米国社会に警鐘を与えるため、特にキリスト教原理主義に対して生命進化、生命の起源、宇宙論の成果をもとに「ほとんど確実に神は存在しない」ことを証明し、この種の宗教が善行に寄与せずむしろ有害であることを論証し、なぜヒトは宗教を信じるのかを進化論的に論じる。

●オンライン作品・同人誌部門

「月からの手紙」(やまだようしろう)

<http://lv1uni.cool.ne.jp/tuki/>

小天体がインド洋上空、315kmで爆発。もし爆発しなければ、インド洋に落下して白亜紀末期並みのカタストロフィーとなるところだった。なぜ小天体が事前に探知できなかったか、また、どうして小天体はインド洋上空で爆発したのか、実はその前に月の「雨の海」にある虹の入江基地である異変が生じていた・・・。

「SPINKLES」スピंकルスの惑星 キャプテン・クロノの漂流記」(zenk∞)

<http://www.oct.zaq.ne.jp/afcfk405/sp-00.html>

2089年、恒星間宇宙船が琴座ベガ星系の惑星ゼトロスを訪れる。そこで宇宙船は大破するが、探検隊員たちは過去の文明の遺跡とともに不思議な生態系を発見する。それは陸上では車輪、キャタピラを、海ではプロペラ、スクリューを持ち、空中にはジェット推進で飛びガス袋で浮遊する生物たちだった・・・。

「MYSTIC LIFE」(たみとし)

<http://www2u.biglobe.ne.jp/~tamito/third.htm>

相次いで無人小型深海調査艇の事故が発生。幾つかの触手を持つ生命体が発見される。触れ合うことで同化でき、知恵も栄養も共有し合えるアイアイたち。マリアナトフでミスライ研究所の深海探査船(TAKO)が試運転を開始。女性パイロットのメリサを乗せて犬の散歩道と名付けられた峡谷を探査し、無人探査船(BEBE)が随伴する。このときイカがアイアイたちを襲撃する。撃退されたイカは(TAKO)を襲い、(TAKO)は浮上不能となる。アイアイたちは・・・。

●オールタイムベスト部門(自然災害SF)

「深海の息子たち」(1952、米ブライス・ウォルトン、邦題「深海レンジャー部隊」)

国連の地震観測研究所が、一年半後、北米太平洋岸を超大規模地震が襲うことを予知。水深10000m以上のミンダナオ海溝に深海基地を設け、300発の原爆でマグマを海中に噴出させて地震エネルギーを発散させるという・・・。

「天候改造オペレーション」(1966、ベン・ボーヴァ、創元推理文庫)

米気候学研究所の一部の研究者が乱流方程式をコンピュータで解く研究を行い、やがて気象予測ビジネスに乗り出す。2週間先の地域別の正確な予報を開始、さらに天候制御の研究を進め、ニューイングランド地方を襲った長期早魃の解消に成功する。ついに発達前の熱帯低気圧を消す<サンダー計画>が許可され、強大化し米本土を襲う可能性の大きいハリケーンの抹消を開始する。しかし、同時発生した4つの熱帯低気圧のうち3つの抹消には成功するが、残る一つが強大なハリケーン・オメガに発達・・・。

「飢えた海」(1978、ウィルバー・スミス、文春文庫)

百万重量トンのウルトラ・タンカー(ゴールデン・ドーン)が建造されるが、コスト削減のため、単一ボイラー、推進器も固定ピッチ1軸として冗長性のないシステムとなった。この(ゴールデン・ドーン)で2千から4万ppmもの高濃度カドミウム硫化物を含有する原油100万トンペルシャ湾から喜望峰を経て、メキシコ湾まで運ぶこととなった。そこに巨大なハリケーン”ローナ”が・・・。

「われは海の子」(1987、福島正実、草土文化ジュニアSF選「果てしなき多元宇宙」に収録)

超A級の大型台風が発生。気象コントロール・センターは台風の被害を防ぐため、危険な放射能を出さないように改良された原爆を投じる。うち一発が不発で水深2000mの海底に沈む。潜水パトロール艇が回収に向かった。沈んでいる原爆のすぐ近くで、バチスカーフ型の海底海洋学実験船より救難を求める女の子の声が・・・。

「大暴風」(1994、ジョン・バーンズ、上下巻、ハヤカワ文庫)

2028年、シベリア連邦が北極海に抑制型弾道ミサイルを配置。その発射の兆候を検知した国連平和維持軍は、反中性子ベリリウム爆弾をアラスカ北部に打ち込むが、北極海のクラストレート化合物の層が崩壊、大量のメタンが大気中に放出されてしまう。これによって温暖化が急進し、海水温が台風の発達する27.5度Cを越える海域が拡大する。やがて太平洋中部で人類史上最大のハリケーンが発生。中心部の風速220ノット近く、高さ140mの波が発生し、カ

ロリン諸島とマーシャル諸島で数百人の犠牲者を出したのち北緯30度を越えても勢力は衰えることなく・・・。

「ツイスター」(1996、米映画、ヤン・デ・ボン監督)

竜巻被害が多発する米国では、竜巻を追跡して観測する研究者を「ストームチェイサー」と呼ぶらしい。主人公たちは小さな無数の観測装置ドロシーを竜巻の進路上に置き、竜巻にドロシーを吸い上げさせて諸データを得ようとする。その彼らの前に彼らの目の前に、最大級F5クラスの巨大竜巻が現れた・・・。

「マグネチュード10」(1996、アーサーC. クラーク、マイク・マクウェイ、新潮文庫)

2024年、プレート衝突による巨大地震の予測とそれをなくす試み。プレート同士を溶接して地震を阻止するという発想は、むしろ地震をより巨大化すると思われ、いただけない。地震発生時のエネルギーは、固着した岩石を溶融させるほどだという。「地球シミュレータ」に類する装置が登場する。

「ボルケーノ」(1996、映画、リチャード・ウッドレー、角川文庫)

ロサンゼルス市内で大規模な溶岩噴出が起きる・・・。小説版では、なぜプレート沈み込み帯で大規模な溶岩噴出が起こるのか、マントル・ブルームとマグマ上昇を混同しているところがある。東太平洋海膨がアメリカ大陸に沈み込むことにより、サンアンドレアス断層が拡大軸に遷移するなんてシナリオも面白いかも。

「震源」(1996、真保裕一、講談社文庫)

「ホワイトアウト」の原作者の作品。気象研究所地震火山部の主任研究官が主人公の長編サスペンス。地震津波監視システム(ETOS)、地震活動等総合監視システム(EPOS)、ハイドロ・チャートを装備する海上保安庁水路部の測量船(海洋)、海洋科学技術センターの(なつしま)と(ドルフィン3K)が登場する。

気象精霊記シリーズ「正しい台風の起こし方」／「爆弾気分の低気圧」(1997-99、清水文化、富士見ファンタジア文庫)

気象精霊の一人が超巨大台風を作ってしまった。これを弱めるために、気象精霊たちは台風自体の低気圧を利用して冷たい深層水を汲み上げる、上流側に別のミニ台風を作ってそれにエネルギーを奪わせる、冷たい雨雲をちまちま取り込むという3つの方法を講じる。ところが、そこに災害オタクの気象精霊がミニ台風を乗っ取り、巨大台風にぶつけて合体させようとする・・・。

「螢女(ほたるめ)」(2001、藤崎慎吾、ハヤカワ文庫JA)

変形菌(粘菌)が登場する。最近、地殻内微生物と地震発生との間に関連があるのではとの仮説が出されているが、それが本作品に取り入れられていることに驚かされる。続編は「ハイドゥナン」。

「燃える氷」(2003、高任 和夫、祥伝社)

2011年、静岡県御前崎沖にメタンガス採取/ハイドレート製造

プラント船を浮かべ、海洋産出試験を開始。「燃える氷」、メタン・ハイドレートは燃焼時の二酸化炭素排出量が少ない利点を持つ。高圧・低温環境にあるハイドレートをどうやって効率よくガス化し、それをどうやって効率よく輸送するかという問題を解決する2つの技術革新によって、商業採掘に大きく動きだそうとするが・・・。

「復活の地」(全3巻、2004、小川一水、ハヤカワ文庫JA)

太陽アマルテを周回する惑星レンカの帝都を、市民500万人の約10%が死亡するという未曾有の大地震が襲う。この立ち直ってもいない首都を再び大地震が襲うこととなり、政治家や軍に失脚させられた主人公たちがそれ備えるためにいろんな手を打つ・・・。

この作品を書くため、作者は過去の大震災の沢山の資料を調べ、情報が来ないということ、行政機能の喪失、指揮命令系統の混乱、その他さまざまな事態のなかで、いかに機能する救難組織を再構築していくかといったさまざまな知見が盛り込まれている。

「M8(エム・エイト)」／「TSUNAMI(津波)」／「ジュミニの方舟—東京大洪水」(2004-08、高嶋哲夫、集英社)

「観測データからの予知」や「フィールドワーク至上主義」が主流のなか、主人公は地震のシミュレーション研究をしているポスドク。それに11年前に神戸の大地震を予測するも発表を躊躇し、震災で家族を失った元教授が協力する。政府が東海地震を警戒しているのに対し、主人公らは、地球シミュレータによる計算を実施した結果、東京直下地震が3日後に発生するという・・・。

続編の「TSUNAMI」では東京直下地震の6年後、今度は東海地震の可能性を予測しようとする。東海、東南海、南海地震が連動して発生することで起こりうる未曾有の津波被害を描く。

「死都日本」／「震災列島」／「昼は雲の柱」(2002-2006、石黒耀、講談社)

作者は内科の医師。南九州カルデラ火山の巨大火砕流噴火で南九州が壊滅。さらに南海トラフのプレート境界地震を誘発・・・。続編の「震災列島」では、東海地震に東南海地震が連動、名古屋に大津波が。3作目の「昼は雲の柱」では富士山を題材。

「異常気象売ります」(2006、シドニイ・シェルダン、アカデミー出版)

一流の気象学者が次々と謎の死を遂げるところから物語が始まる。2人の未亡人が、高度な情報処理技術を駆使するシンクタンクの陰謀に、知恵で立ち向かう。

気象学者たちが研究していたのは世界のあらゆる場所で異常気象を作り出すことのできる衛星マイクロ波レーザーなるもの。

「スーパーストーム」(2007、NHK/英BBC/米Discovery Channel/独ProSieben 国際共同制作) 前出。